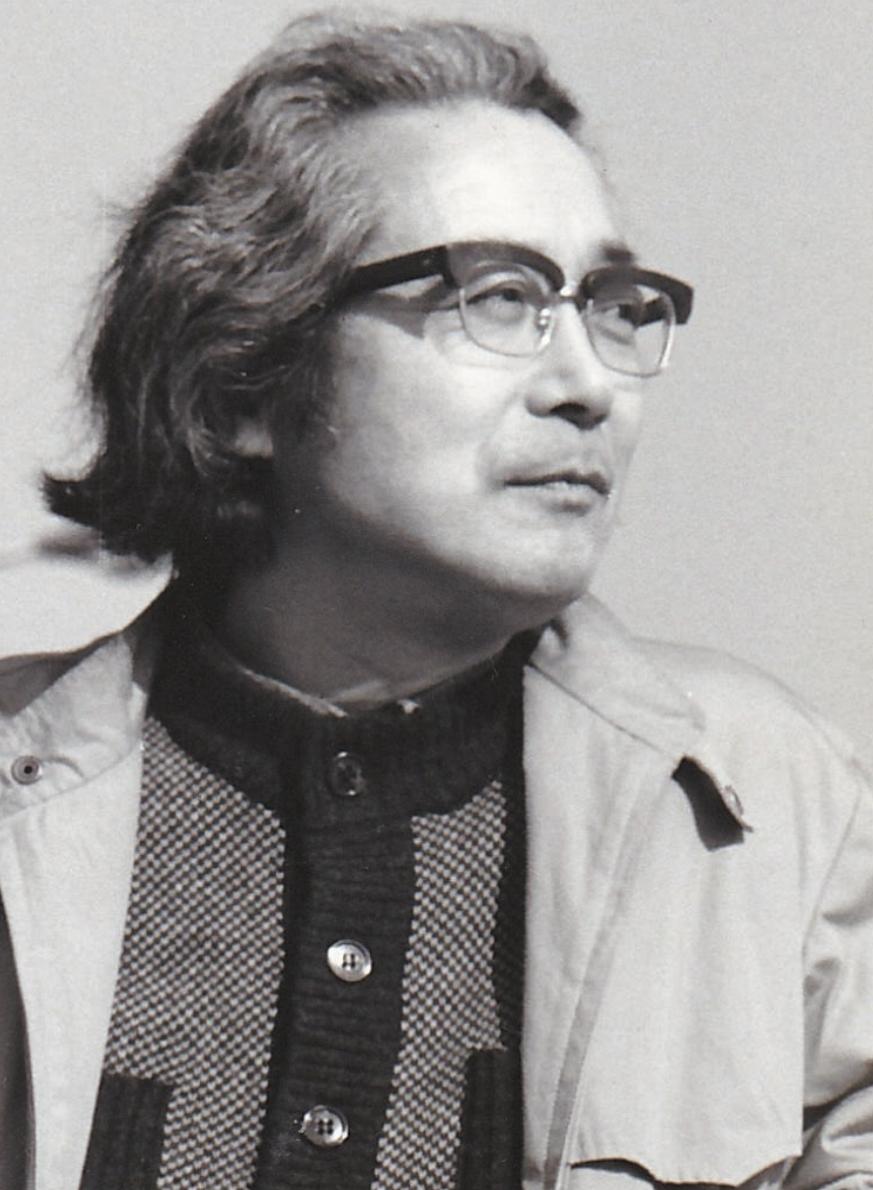


狭山を愛した詩人 生誕100年

吉野弘の世界をたどる

今年生誕100年を迎える、詩人の吉野弘さん。結婚披露宴でよく引用される「祝婚歌」や、国語の教科書に掲載された「I was born」「夕焼け」など、数多くの名作を遺しました。狭山市で過ごした35年間の暮らしの中での自然や人々との交流が、作品に色濃く息づいています。今月は、吉野さんの足跡をたどりながら、詩の世界を感じられるスポットなどを紹介します。



昭和57年の吉野弘さん(家族提供)

「夕焼け」より一部抜粋

やさしい心の持主は
いつでもどこでも
われにもあらず受難者となる。
何故って
やさしい心の持主は
他人のつらさを自分のつらさのように
感じるから。
やさしい心に責められながら
娘はどこまでゆけるだろう。

やさしい心の持主は

いつでもどこでも
われにもあらず受難者となる。

何故って

やさしい心の持主は

他人のつらさを自分のつらさのように

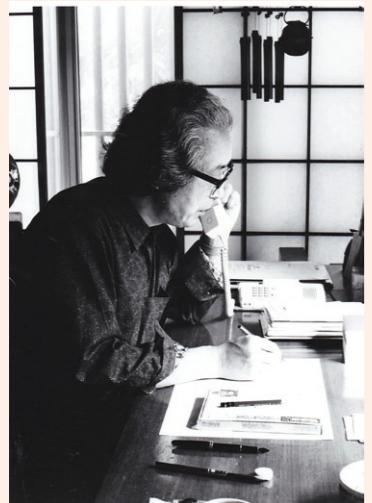
感じるから。

やさしい心に責められながら

娘はどこまでゆけるだろう。



次ページ 吉野弘さんの生涯



▲昭和62年 狹山時代の自宅の書斎(家族提供)

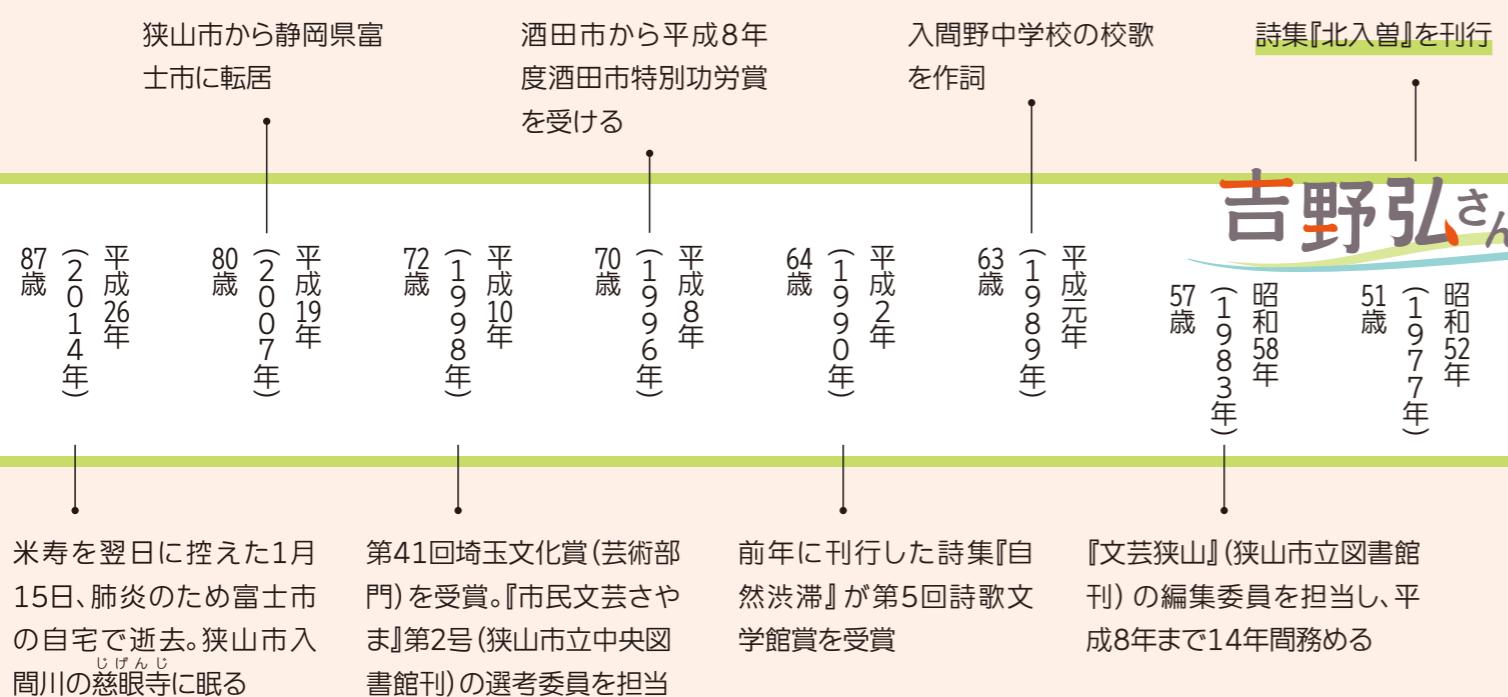
狹山市から静岡県富士市に転居

詩集『北入曾』

昭和47年に狹山市に居を構えた吉野さんは、静岡県富士市に転居するまでの35年間、詩の創作だけではなく、校歌の作詞や文芸誌の編集などにも積極的に取り組みました。昭和52年、狹山市に来て初めて刊行された、吉野さんの代表作とも言える詩集『北入曾』には「茶の花おぼえがき」をはじめ、狹山での日常や自然を表した作品が収められています。詩集の題名に地名を用いることは大変珍しく『北入曾』は吉野さんの狹山への愛着がとても感じられる一冊です。

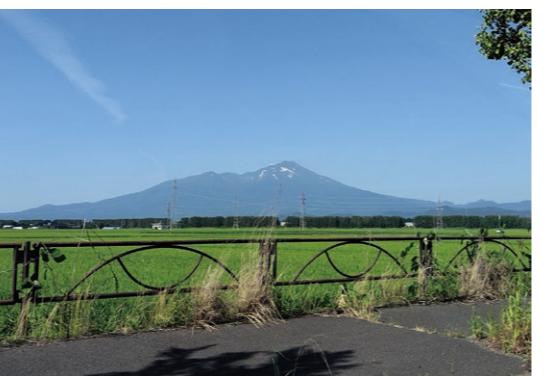


▲詩集『北入曾』(吉野弘/青土社/昭和52年)



酒田と狹山で愛した景色

吉野さんは茶畠とケヤキ、富士山を特に好んでいたそうです。狹山市の自宅からは茶畠とケヤキの木を眺めることができ、富士市の自宅では富士山が見えるように窓を設けたといいます。幼少期から31歳までを山形県酒田市で過ごした吉野さん。酒田市にある琢成小学校の校歌も作詞しており、鳥海山や最上川などに囲まれ、自然に恵まれた風土の中で育ったことが、この歌詞の中にも表れています。酒田市での「緑の田んぼが広がる向こうに見える鳥海山」という景色と狹山の「緑の茶畠とその向こうに見える富士山」という風景が故郷と重なり、狹山の景色、そして後の富士市における富士山の眺めも気に入っていたのではないでしょうか。



▲鳥海山(さやま吉野弘の会提供)

次ページ 市内にある吉野さん縁の場所とエピソード

詩人・吉野弘

大正15年1月山形県酒田市に生まれ、戦時中に酒田市立商業学校を卒業して帝国石油に入社しました。激務がたり、昭和24年に肺結核を患った吉野さんは入院中に詩人・富岡啓二さんと出会い、この交流がきっかけで本格的に詩作を始め、勤務の傍ら詩の投稿をしたり、詩の会に参加したりしながら、31歳で初めての詩集を刊行しました。吉野さんの作風は、何気ない日常の中で生きる人間の弱さや優しさ、温かみを描くものが多く、狹山で創作した詩では自然に関することもよくテーマとしています。詩作の他にも、地域の講座や校歌の作詞、文芸誌の編集にも尽力し、地域に深く根ざした詩人として活躍しました。



▲昭和57年の吉野弘さん(家族提供)



▲長女・奈々子さん8歳、次女・万奈さん0歳(家族提供)

詩誌『詩学』に「爪」「I was born」を投稿し、翌年の2月号で新人に推薦される。以後、同人誌『権』の他、各種の雑誌、新聞などに詩や書評を発表する



◀1939年(13歳)
酒田市立商業学校2年生のとき(家族提供)

吉野弘さんの生涯

吉野弘さんは、1926年1月16日、山形県酒田市で生まれました。大正15年、肺結核になり入院・療養。入院中に詩人・富岡啓二氏と知り合い、交友を深めました。1939年(13歳)、酒田市立商業学校2年生のとき、吉野さんは、詩の会に参加したりしながら、31歳で初めての詩集を刊行しました。吉野さんの作風は、何気ない日常の中で生きる人間の弱さや優しさ、温かみを描くものが多く、狹山で創作した詩では自然に関することもよくテーマとしています。詩作の他にも、地域の講座や校歌の作詞、文芸誌の編集にも尽力し、地域に深く根ざした詩人として活躍しました。

前年に刊行した『感傷旅行』が第23回読売文学賞を受賞。東京都板橋区から狹山市北入曾に転居し自宅を構える。近所の茶畠で、井戸端園の若旦那・仲川幸成さん(前市長)と出会う

長女・奈々子さん誕生

初めての詩集『消息』を刊行

2年にわたって制作した5冊の自作の詩集を『合本』という形にまとめる(吉野さんの死後、家族により発見)。

5冊の手書きの詩集をまとめた『合本』

吉野さんは帝国石油に勤務していた昭和22年から詩を書き始め、入院前の2年間で『體臭』『山巔』『鶏肋』『のすたるぢや』『道』という5冊の手書きの詩集を作りました。これらの詩集は、会社の「支払金内訳書」などの事務用書類の裏面に、ペンや鉛筆で書かれたものです。昭和26年にこれらの手書きの詩集を1つにまとめて『合本』として吉野さん自身の手で製本されました。病後、半日勤務の生活を送りながら作られた『合本』は、吉野さんの死後に家族が書斎で発見したもので、大切に保管されてきた吉野さんの若き日の情熱あふれる貴重な作品です。



▲左「賦すさくらんば」25ページ、右「書斎」7ページ(家族提供)



★慈眼寺(入間川1-9-37)

吉野さんの墓所があり、自身の詩「草」「いのちは」が刻まれている詩碑があります。

■優しさの奥に真と一本筋のある方でした

優しく穏やかな吉野さんは、言葉を大切にする几帳面な方で、寺報を送るとすぐに感想を寄せてくださいました。吉野さんが寺を訪れる長く語り合いましたし、ある時は子どもを見ると「愛おしくて涙が出る」と涙を流すような感受性の豊かな方でした。お盆の法要には何か感じるものがあったようで、毎年早めに来られては準備する人の様子を本堂に座って静かに見守っていました。



境内にある「いのちは」という詩を刻んだ碑は私が建立しました。この詩を選んだのは、作中にある「世界は多分他者との総和」という言葉が、仏教の「縦に繋がる総和」という思想と通じると感じたからです。吉野さんという狭山市ゆかりの詩人がいたことを、詩碑を通して後世に残していきたいと思っています。

★常泉寺

樹の目標は何か、完成とは何か もちろん、人は知りもしない。
(「樹木」詩集『陽を浴びて』より一部抜粋)

この地域はかつて武藏野の雑木林が広がる自然豊かな場所でした。境内にもかつてはケヤキや銀杏の大木があり、散歩をしながら娘たちにケヤキの話をしたそうです。



★野々宮神社

作品の舞台かどうかははっきりと分かっていませんが、神社内の立派なケヤキと銀杏は、吉野さんの自宅から眺めることができたそうで、この辺りの竹林も目にしていたと考えられます。吉野さんは竹を見てビルを思い浮かべたのか、それともビル群を見て竹を重ねて想像したのか。その発想の源に思いを巡らせる興味深く眺めることができます。



（竹）詩集『自然渙滞』より一部抜粋
光も入らない円筒形の部屋ばかり
縦列の高層ビル「竹」

次ページ 図書館などで読める吉野さんの作品

▶墓所に刻まれている「草」
草は地面から伸びるため、
この詩はあえて下揃えにな
っています



◀「いのちは」が刻
まれている詩碑
(MTW提供)



吉野弘さんが見ていた風景に触れてみよう

★不老川

両膝をぴったり合わせ脚を曲げたように 堤に生えている榎の二本の幹 (「脚」詩集『叙景』より一部抜粋)
つくし 土筆 光をたっぷりふくませて 光を春になすっています (「つくし」詩集『自然渙滞』より一部抜粋)

吉野さんは不老川沿いもよく散策していましたといいます。かつて下流には「脚」のモデルになった榎の木があり、対岸の住宅付近は春になるとたくさんのつくしが芽生える場所だったそうです。「つくし」からは、散歩の途中に背の高い吉野さんがしゃがみ込み、小さなつくしを優しいまなざしで見つめる姿が思い浮かびます。



▲つくし(入曾を記録
する会提供)



▲脚(さやま吉野
弘の会提供)
※現在はありません

★茶の花おぼえがき誕生の地

栄養生長と成熟生長という二つの言葉の不意打ちに会った私は、二つの生長を瞬時に体験してしまった一株の茶の木でもありました。(「茶の花おぼえがき」詩集『北入曾』より一部抜粋)



それぞれの場所にちなんだ詩の解説
は「さやま吉野弘の会」が「茶の花文学散步」のために作成したもの
を参考しています

★入曾地域交流センター
(吉野さんの作品の展示があります)

★金剛院

寺の本堂前 銀杏の巨木が喪服の人の右
に左に 熟した金色の実をしきりに降らせて
いた。 (「銀杏」詩集『叙景』より一部抜粋)



金剛院の境内には詩のモデルとなった大銀杏があります。現在は一部を伐採し、当時よりも少し低くなっているようです。詩では「寺は幼稚園を兼ねていた」と紹介され、こどもたちの生き生きとした様子や、法事に来ていたと思われる喪服の人々の姿も描かれています。お寺にある大きな銀杏を主役として、こどもたちから大人たちまでの、自然と日常の営みが凝縮されているような作品だといわれています。

■吉野さんが衝撃を受けた「成熟生長」という言葉



▲さやま吉野弘の会 仲川幸成さん(作中の若旦那・前市長)

詩集『北入曾』にある「井戸端園の若旦那が、或る日、私に話してくれました」で始まるこの詩は、私と吉野さんとの会話を基に生まれた作品です。吉野さんの自宅からは茶畠が見え、私が茶の木の手入れ作業をしていることを確認すると、よく畠に入ってきて、作物や育種のことなどを熱心に尋ねてきました。奥さんから「忙しいのに、何度も伺って申し訳ない」と言われるほどでした。

会話の中でとりわけ吉野さんが衝撃を受けていたのは、私が発した「成熟生長」という言葉です。「茶の木は肥料が多いと花をつけず、栄養が尽きたときに吸収できなくなりと花を咲かせる。花は“終わり”であると同時に、次の世代の“始まり”でもある」ということを話しました。この自然の営みが、もともと吉野さんの根底にあった「いのち」というテーマと重なったのだと思います。

吉野弘 生誕100年記念イベント

茶の花回想録「吉野さんとのおもいでばなし」

吉野弘さんの詩の作品や人柄を演劇で鑑賞できるイベントです。

日時 2月15日(日)、14時～15時30分

場所 慈眼寺(入間川1-9-37)

出演 MTW(ミュージアム・シアター・ワークショップ)

定員 70名

申込み 1月20日(火)、10時から入曾地域交流センターへ☎2959-3004(電子申請・電話可)



▲2024年公演の様子



▲申し込み
はこちら

▲申し込み
はこちら



図書館で手に取れる書籍

吉野弘さんに関する書籍を図書館で借りることができます。詳細は、図書館公式ホームページをご覧ください。作品を通して、吉野さんの言葉の世界に触れてみてはいかがでしょうか。ページを開けば、そっと心に寄り添う一行と出会えるかもしれません。



『北入曾』
(吉野弘/青土社/昭和
52年)



『贈るうた』
(吉野弘/花神社/平
成4年)



『二人が睦まじく
いるためには』
(吉野弘/童話屋/平
成15年)



『妻と娘二人が選んだ
「吉野弘の詩」』
(吉野弘/青土社/平成
27年)

「祝婚歌」

結婚式のスピーチでよく紹介される「祝婚歌」。この詩は、姪の結婚式に出席できなかった吉野さんが、新郎新婦にお祝いとして贈った詩です。

市では、婚姻届を提出された方に「婚姻記念証」をお贈りしています。表面には広報さやまの「さやまの昔話」などでおなじみの池原昭治さんが描いた童絵と、吉野弘さん直筆の「祝婚歌」を載せ、裏面には婚姻届を複写した特別な日を記念する一枚となっています。



皆さん一度は耳にしたことがあるのではないでしょか

今回のイベントを企画している

「さやま吉野弘の会」の方にお聞きしました！

イベントの魅力を聞かせてください



▲さやま吉野弘の会 可知教子さん

演劇を観た方へのメッセージ

この演劇作品は、詩やエッセイだけでは知ることのできない、吉野さんの「日常の素の姿」を伝えるため、ご家族や生前に交流のあった方々のお話を基に作られました。演劇という形だからこそ、作品を読むよりも目と耳で触れることができ、吉野さんの人柄がよりスッと心に入ってくるのではないかと思います。

見どころは、今まで一部分のみ紹介していた長い散文詩「茶の花おぼえがき」を全編紹介することです。舞台となっている狭山ならではの場面ですし、朗読ではなく役者が演じることで、吉野さんと狭山の風土との出会いの物語として表現されています。また、会場が初めて吉野さんの菩提寺である慈眼寺となり、役者も一部変更になっているので、前回ご覧になった方にも新しい気持ちで楽しんでいただけると思います。ぜひ、足をお運びください。

観劇後には、ぜひ詩を読み返してみてください。私たちと同じ日常を見つめながら、少し違う視点で言葉を紡いだ吉野さんの魅力がじんわりと伝わってくるはずです。そして、何気ない日常の中で「自分だったらどう感じるだろう?」と胸の内に問いかける、小さなきっかけになればうれしく思います。

問合せ 広報課へ☎2935-3765